

## 福祉医療機構（WAM）助成金により作成— 現在行われているタキザワ式リハビリの開示

滝沢 茂男<sup>1</sup>

<sup>1</sup>バイオフィリア研究所

### ビデオセッション

このビデオセッションは身体機能維持と障害の克服に、これまでのジョイントセミナーでの講演が示した効果をもたらした実際を示している。

簡単に実施できるタキザワ式リハビリテーション（リハビリ）の導入が、これまで非効率の指摘が多かったリハビリ医療の改善につながることを願っている。

まず、はじめに非効率性について、米国と日本、さらに我々の研究について述べる。続いて、1として現在行われている、効果的なリハビリの情景を、2として30%の寝たきり老人が機能を再獲得したりハビリ、3として毎回行われる体操を紹介する。

### 非効率性の指摘

米国では資金面の指摘が続く。The Office of Inspector General (OIG) of the Health and Human Services (HHS)における2000年6-7月号で、「Rehab Is Under the Gun Again」の表現で、OIGの調査では、外来リハ施設（ORF）のサービスの大部分が「不必要または疑わしい」と判明と表現されました。ORFのサービスに対するメディケアの支払いの54.7%が“不必要または高度に疑問の余地がある”と結論づけ、さらに、2009年と2010年では、メディケアは入院患者のリハビリ施設に840万ドルを過払いしたとOIGは述べた。

上記を含め、リハビリ医療に関わる請求の不合理性を示す報告がたくさん報告されている。

日本では、国民皆保険で必要な、または期待されるリハ医療を皆が受診している中での要介護高齢者の増加が明らかになっている。2000年の介護保険導入以来要介護高齢者数は毎年集計され、公表されている。要介護高齢者の増加は、2000年218万人対高齢者比9.9%（高齢者2204万）2020年672万人対高齢者比18.9%（高齢者3564万）と著しく、発生は割合で2倍になっている。リハビリ医療に関わる理学療法士の数は24,027人から125,372人へ増加、医療機器の導入、チーム医療の導入高度化等の成果はまったく反映されていない。この間の高齢者の増加割合を勘案しても、その非効率性は明らかである。

また、著者はリハビリ医療の日本の草分けであるリハビリ医福井圀彦博士、さらには国立障害者リハビリ病院院長木村哲彦氏と共著の論文において、他動運動で実現される神経筋促通法の効果について、「高齢者のリハビリについて現状のまま進めていても効果は期待できない」と報告した。

その基礎は以下の調査である。

「神経筋促通法の代表的な手法を意味する Facilitation Techniques (FT) と筋力増強, ROMex (可動域訓練), 動作訓練などの旧来の手法を意味する Traditional Techniques (TT) による結果を対比すると、FT が TT より効果が見られたとするものはほとんどない。

日本神経学会, 日本脳卒中学会, 日本脳神経外科学会 (脳卒中の外科学会), 日本神経治療

学会、日本リハビリテーション医学会の5学会と厚生労働省の脳梗塞・脳出血・くも膜下出血の3研究班からなる合同ガイドライン委員会は、共同で1960～1990の30年間のエビデンスに基づいたリハの論文36編を調査した。ADLや歩行能力を比較の基準として、FTとTTとの効果の差を述べたこれらの論文には以下の諸点があげられている。

- ① Bobath法またはPNF法はTT法との差を認めなかった (Dicksteinら)
- ② Rood及びBobath法とTT群には差が認められなかった (Logigianら)
- ③ PNFとBrunnstrom法をTT群に加えても差は認められなかった。(Sternら)
- ④ Neurodevelopmental exercise (Davis)を5週交代で交互に行っても、歩行・手の機能の改善に有意な差を認めなかった (Wagenaarら)」

### 研究費の申請からみた評価

我々の研究に関して直接的なリハビリ医療改革という言葉を使わない場合は慶應義塾大学や横浜国立大学、バイオフィリア研究所で頻回の科研費を得て研究を進めてきた。しかしながら直接的なリハビリ医療改革に関する提案では、一例として厚生科研に応募した際には、評価点に「1点」を取るという絶望的な事態があった。

これに関して厚生科研の関係者から、これまで「1点」の評価点がついた研究費の申請を見ることがないという言葉が返ってきた。

以上リハ医療に対する状況分析と2019年までの我々の研究への評価を述べた。

### 世界からの期待

2019年以来の我々の研究に対し、世界からの期待が高まっている。

評価の初めとして、2019年のISPRM神戸大会で我々の研究はロングワークショップとして取り入れられた。ワークショップでは、寝たきりから3割の者が歩行を再獲得した2000年のISPRM1回大会以来の発表をまとめ、手法と、結果を明らかにした。

さらに、我々は脳機能に関しFNIRSとfMRIの研究を実施してきており、こうした効果が脳の神経幹細胞がより増殖していること、障害部位に集まることによる代償的な神経伝達の再建にあるのではないかという考えについても述べた。

我々のこれまでの研究経過をポーランド科学アカデミーと日本学術振興会において認められ二国間ジョイントセミナーを2020年11月に開催できることとなった。これに関する報告書は英文と日本語で発表される。

以上のように厳しい評価を得てきたが、世界から期待が高まっている。そのリハビリ医療の実際をビデオセッションで紹介する。